

岡村家日記抄を読み解く ～ 賀露誌考研究会 研究報告 ～

『賀露誌』には、賀露神社に伝わる「岡村家日記抄」が紹介されています。この日記抄は、第44代および第45代宮司によって記されたもので、天保3年(1832)から嘉永7年(1854)までの約20年間にわたり、鳥取藩主の賀露神社参拝の様子が記録されています。

藩主が参拝された際には初穂料が奉納され、宮司はその返礼として、賀露で獲れた魚介類を献上しています。記録からは、こち・まるご・たい・せいご・かつおなどの魚類のほか、かきやしじみなどの貝類が水揚げされていたことがわかります。

ただ、カニに関する記録は見られません。鳥取藩の記録には、天明2年(1782)に津山藩への献上品として松葉ガニが用いられたことや、弘化2年(1845)に家老宅の棟上げの馳走として供されたことが記されています。江戸時代の賀露では、磯漁（地曳網漁）のみが行われ、沖合漁が禁じられていたため、カニは入手しにくかったものと思われます。また、「明治・大正時代頃までは、その食べ方も広く知られていなかった」との記録もあり、当時はカニの漁獲や流通は限られていたのかもしれません。

当時、賀露神社が新鮮な魚をどのように藩主へ献上していたのか、その方法は明らかではありませんが、蓋付きの生け簀を海や千代川に沈めていたとの伝承が残されており、当時の漁村の暮らしの一端をうかがうことができます。

この日記抄は、第9代藩主・池田斉訓(なりみち)の参拝記録から始まります。斉訓は12歳から20歳までの間に15回参拝しており、狩猟や砲術の実演を見学したことなども記されています。特に天保11年(1840)には8回参拝し、その翌年、21歳で江戸藩邸にて死去しました。

第10代藩主・池田慶行(よしゆき)は10歳で藩主となりましたが、17歳で鳥取城にて死去しました。第11代藩主・池田慶栄(よしたか)は加賀藩前田家から迎えられましたが、初めての国入りの途中に京都・伏見藩邸で急死しており、いずれも参拝記録は残されていません。

第12代藩主・池田慶徳(よしのり)については、嘉永5年(1852)から嘉永7年(1854)までの5回の参拝記録が残っています。嘉永7年は日米和親条約が締結された年であり、日本はやがて幕末の動乱期へと向かいます。慶徳は徳川家の親族でありながら官軍として戊辰戦争を戦い、新政府では重職である議定に就任。さらに、版籍奉還後には鳥取藩知事を務めています。

日本が大きな転換期を迎えるなか、賀露の文化や経済もまた変化していきました。賀露誌考研究会では、こうした歴史の中に埋もれた賀露の文化や歴史について、今後も資料や伝承の調査・研究を重ねながら、その実像を明らかにしていきたいと考えています。

参考資料

- ・『賀露誌』 2009年 賀露町自治会発行
- ・鳥取藩主に関するデータは、Wikipediaを参照
- ・新暦は「こよみのページ※」より算出 <https://koyomi8.com/kyuureki.html>

※ 現代天文学を基に機械的に旧暦を再構成。当時の暦（頒暦）との差を考慮しない場合がある。

